

「エミシ」とは何か

福崎 孝雄

はじめに

『遍照發揮性靈集』（以下『性靈集』）に収載される「高雄山寺に三綱を扱ひ任ずるの書」における「旃陀羅惡人」の文言の問題が朝日新聞に掲載されたのは、昭和五十九年、ちょうど弘法大師一一五〇年御遠忌の年であった。それ以来、真言各宗においても空海の文章について、差別的表現はなかったのかどうかの点検が行われてきた。そうした中で問題として再び指摘された文言のひとつがこの「エミシ」の問題である。

それは『性靈集』巻第一の「野陸州に贈る歌」及び巻第三の「伴按察平章事が陸府に赴くに贈る歌」において「エミシ」を差別する文章が出ているという問題である。

「野陸州に贈る歌」（空海が陸奥守に任せられた小野岑守に贈った激励の手紙）においては、

「毛人羽人境界に接し、猛虎豺狼処処に鳩る。老鴟の目、猪鹿の裘、髻の中には骨毒の箭を挿み著け、手の上には毎に刀と矛を執れり。田つくらず、衣おらず、麋鹿を逐う。晦とも靡く、明とも靡く、山谷に遊ぶ。羅刹の流にして人の儔にあらず（羅刹の流にして非人の儔なり。と読む説もある）。時時人の村里に來住して千万の人と牛とを殺食す。云々」

「伴按察平章事が陸府に赴くに贈る歌」では

「蕞爾たる毛夷良垂に迫り居り、豺の心蜂の性ありて、代を歴て梗をなす。」

「毛夷の蝮の陳は一把の草 羽狄の豺の営は半掬の塵」

等である。

これらの中で空海は、「エミシ」と思われる人々を「毛人」「羽人」「毛夷」「羽狄」などと卑劣な表現をしている。しかし、最も問題になるのは「野陸州に贈る歌」の文章であろう。すなわち、「エミシ」に対して、「年老いた鳥のような目をしていて、猪や鹿の革の服を着て、毒を塗った骨の矢を持ち、常に刀と矛を持っている。そして稲も作らず、絹も織らず、鹿を追っている。昼も夜も山の中におり、悪鬼のようで人間とは思われない。時々村里に来ては、多くの人や牛を殺していく。」と述べているのである。

これまでの戦いの相手（朝廷側からすれば）でもあり、文化の違いがある「エミシ」に対して、空海はこのように表現した。しかし、宗教者は国家の枠を超えて、さらには文化の枠を超えてどのような人間をも一人の人間として見ていかなければならない。なのに、空海は「エミシ」を人間として見ていなかったのではないか、差別していたのではないか、と指摘されているのである。

本宗において「エミシ」問題が最初に提起されたのは、昭和五十七年に提出された「同和問題に関する答申書」（教化研究所）においてであった。その後、「旃陀羅」問題をめぐって『』という本宗の見解の中でこの問題に若干触れているが、今回の論文では、まず、これまでの多くの研究の中で「エミシ」がどのような人々であったとされているのかを整理しておきたい。

「エミシ」の呼称

「エミシ」の語源は一体何なのであろうか。様々な説が唱えられているが、そのいくつかを紹介しておこう。

弓人（ユミシ）・弓師に由来（松岡静雄説、新村出説）するという説やアイヌ語で「人」を意味する「エンチュ」は古くは「エムチュ」であり、それを聞いた日本人が「エミシ」「エミス」とうけとったという説。さらには、アイヌ語の「刀剣」を意味する「エムシ」「エムス」を語源とし、「エミシ」は武人・勇者の義であるという説等々があり、まだ定説はないようである。

表記については、古くは毛人（エビス）と表記していたが、なぜ「蝦夷」の字の使うようになったのかはこれまた謎である。

『日本紀私記』には「江美須（エミス）」という表記があり、『積日本紀』では「蝦夷（エビス）」、養老説では「衣比須（エヒス）」、『日本霊異記』には「他田舎人蝦夷」なる人名の注に「衣比須」とある。中国の資料においても、『新唐書』『通典』あたりから「毛人」から「蝦夷」に変化している。ここでもいくつかの説があり、決定的なものはまだ出てきていない。

中国からの借用説は、六五九年「ニギエミシ（エビス）」を目の当たりにした中国側が、その容貌や特技を見て当時の中国の東北住民の一部との共通性を認め、その住民を「カイ（蝦夷）」とも呼んでいたのです。その漢字を使ってしまったというもの。

日本での造語説は、蝦は海老のことであり、海老は長いヒゲをもち腰の曲がった醜いものとみなし、蝦夷は「醜い野蛮人」の意となり、国家が東北住民に対して憎しみをこめて与えた蔑称であるとする（蘇我蝦夷は崇峻天皇や聖徳

太子の子供の山背大兄王一族を殺害した極悪人であるので、「日本書紀」は筆誅を加え、毛人を蝦夷に改めたとする説もある。

このように、「エミシ」の語源も、また「エミシ」の表記についても現段階ではまだ明確にされていないのである。しかし、ひとつ注目すべき事柄が指摘されている。「日本古代人名辞典」を見てみると、奈良時代において毛人という名を持つ人間が四〇名ほど確認できるが、徐々に減少していき、九世紀半ば以降はみえなくなるといっているのである。このあたりで「エミシ」の概念が変化し、マイナスのイメージで確定されたと見ることが出来るかもしれない。

「エミシ」の定義

「エミシ」とはどういう人々を指すのであろうか。空海自身は「エミシ」という言葉を使ってはいない。「毛人羽人」「夷狄」等という言葉が存在しているだけである。当時の陸奥国に赴く友人（小野岑守）に送る書簡の中に出てくる文章に「毛人羽人」等の文言が出てきていることから、「毛人羽人」とは常陸の国より北に、つまり当時の朝廷の勢力のほとんど及んでいない北の地方に住んでいた人々を指していると思われる。

歴史書によればそうした人々を「エミシ・エミス・エビス・エゾ」と呼称し、「夷」「狄」「毛人」「蝦夷」などと漢字表記しているが、前述したように確定した表記がない上に、特定の民族を指して「毛人」あるいは「蝦夷」と表記しているとは思われないので、ここでは敢えて「エミシ」と表記することにした。

これまでも様々な研究がなされてきているが、いまだに「エミシ」の概念を規定するまでには至っていないのが現状である。つまり、「エミシ」が東北の辺境地に住む日本人であるのか、あるいはアイヌ人等の別の民族であるのか結論が出ていないのである。

異民族説として、喜田貞吉はエミシ・エゾの呼称の違いはあつても、蝦夷は一貫してアイヌ民族をさすとし、津田左右吉もエミシ＝アイヌとは断定しないが、「異民族たるエミシ」と規定する。高橋崇はアイヌ語を使う人を指すとし、金田一京助は本州にいたアイヌが蝦夷で、北海道に残った蝦夷がアイヌであるとする。

一方、伊東信雄は当初辺境日本人説を説く。エミシが「一般日本人と著しくちがった文化を持つ民族であつたという証拠は考古学上からは挙げることはできない。彼らが異民族視されたのは、都の人々にくらべて文化が少し遅れていたのと、政治的に日本政府と敵対していたため」であるとした。また、児玉作左衛門は、エミシは「元来は日本人であり、辺境にあつて王化に浴しないものに与えられた名称」であり、エゾは「本質的に日本人とは異なつた特定の民族」であるとした。また、長谷部言人は、蝦夷は元来東夷と同じ意味で用いられた名称で、民族名ではなく「辺民」または「方民」と規定する。田名網宏も中世以降の蝦夷（エゾ）は疑いもなくアイヌであるが、エミシ・エビスは朝廷の支配圏外にあつた奥羽地方の辺民である。エゾとエミシは直接のつながりはないとした。

しかし、近年は折衷説が有力である。それは高橋富雄に代表されるが、桜井清彦も、蝦夷の中には辺境にあつて人種的には日本人だが大和朝廷にまつろわぬ者どもと、異人種としてのアイヌの両者が包含されていたとし、虎尾俊哉は、エミシとは「辺境の勇者」としつつも、東北地方におけるアイヌ語地名や考古学的成果にもとづき、エミシ＝アイヌの可能性を指摘する。また、伊藤玄三は、平安時代末以前の蝦夷は「地域的にも古代国家の範囲外の地域、すなわち東北部から北海道にかけての地域がその居住対象」である人々であり、「大局的には後世のアイヌとの関連を含めた観念でみていく必要」を論じる。

研究の時代的な流れでいえば、異民族説、辺境日本人説、折衷説という流れである。現在では、折衷説が主流であり、異民族であるとか、辺境民であるとか、特定しないことが多いが、「エミシ」は文化の周縁（辺境）に生活して

いた、ということだけは確かである。そこで、本論文においても折衷説の視点で「エミシ」を見ていきたい。

辺境の人々

ところで、辺境の民を知る上でいくつかの資料がある。今我々が問題とする「エミシ」は奈良から平安初期の八世紀から九世紀中頃までであるので、時代は下ることになるが十分参考になる資料であると思われる。

その一つは『諏訪大明神絵詞』権祝本（一三五六年）下であり、エゾについて記述したものである。

「蝦夷カ千嶋と云ヘルハ我国ノ東北に当テ大海ノ中央ニアリ、日ノモト・唐子・渡党此三類各三百三十三ノ嶋ニ群居セリト、一嶋ハ渡党ニ混ス、其内ニ宇曾利鶴子□、堂宇満伊犬ト云小嶋トモアリ、此種類ハ多ク奥州津軽外ノ浜ニ往来交易ス、夷（エヒス）一把ト云ハ六千人也、相聚ル時ハ百千把ニ及ヘリ、日ノ本・唐子ノ二類ハ其地外国ニ連テ、形体夜叉ノ如ク変化無窮ナリ、人倫禽獸魚肉等ヲ食トシテ、五穀ノ農耕ヲ知ス、九沢ヲ重ヌトモ語話ヲ通シ堅シ、渡党ハ和国ノ人ニ相類セリ、但鬣髪多シテ、遍身ニ毛ヲ生セリ、言語俚野也ト云トモ大半ハ相通ス、……」

これによれば、エゾには三類（日の本、唐子、渡党）の人々がおり、日の本、唐子は夜叉の如くであり、穀食をとらず肉食のみで、農耕を知らず、言語はほとんど不通であるという。ただ、渡党は和人と似ていて、鬣多く多毛であるが、言葉はなんとか通じるという。

多分「エミシ」の場合もこれに似ていたのではないだろうか。「アイヌ語」の地名が各地に残されていることから、別の民族がいたことを否定することはできないが、言葉の通じる中間的な人々がいたということ十分考えられる。

ところで、朝廷の力の及ばない地域に住んでいた人々は、「エミシ」ばかりではない。九州における熊襲・隼人なども辺境の人々であった。「平家物語」では日本の西の境界とされる鬼界が島の様子を次のように記している。

「薩摩瀉鬼界が島へぞ流されける。彼島は、都を出て遙々と波路を凌いで行く処なり。おほろげにては船もかよはず。島には人希なり。自ら人はあれども此土の人にも似ず。色黒うして牛の如し。身には頻に毛生つつ、言詞も聞知らず。……衣裳なければ人にも似ず。食する物も無ければ、唯殺生のみを先とす。賤が山田をかへさねば、米穀の類もなく藺の桑をとらざれば、絹帛の類も無りけり。」

ここでも、住民はとも人とは思われない。言語も不通であり、肉食、多毛、穀類もない云々とある。これは「蝦夷が千嶋」の描写とよく似ており、これを指摘した大石直正は「東西の違いはあっても、国の国境の外に住む人々は共通の特色を持っているものと受け取られていた。」と述べているが、こうした認識は、奈良・平安の時代においても同じではなかっただろうか。

また、土地の人々を肌の色、言葉、衣食住の違いから「人にも似ず」と表現していることは、「人」の概念が現在とはまるで違っていたことを物語っている。「人」＝「文化」であり、言葉、農耕（食生活）・衣服（絹）等の有無が相手を判断する大きな目安となっていたのではないだろうか。現在のような様々な情報が得られない状況下で、何を持って「人」としていたのか、少なくとも現代の我々とは違った「人」の概念があったと思われる。

「エミシ」観

古代資料を見ていくと、「エミシ」と思われる人々に関する記述がいくつか出てくる。六五九年、遣唐使の中に「エミシ」の男女二人を同行させているが、その時の唐の天子とのやりとりの様子が『博徳日誌』（中国の文献にはこ

までの記事はない)にでてくる。

天子 これらの蝦夷の国は、いずれの方にあるぞや。

使者 国は東北にあり。

天子 蝦夷は幾種ぞや。

使者 類三種あり、遠き者をば都加留と名け、次の者をば鹿蝦夷と名け、近き者をば熟蝦夷と名く、今此は熟蝦夷なり。歳毎に、本国の朝に入り貢る。

天子 その国に五穀ありや。

使者 なし、肉を食ひて存活ふ。

天子 国に屋舎ありや。

使者 なし、深山の中にして、樹の本に止住む。

天子 朕、蝦夷の身面の異なるを見て、極理りて喜び怪む、云々

これによれば、蝦夷には都加留、鹿蝦夷、熟蝦夷の三種があつて、その中で遣唐使として加わったのは比較的近くに住む熟蝦夷であり、その熟蝦夷は朝貢している。その生活は、山の中に住み狩猟生活をしており、面構えは都人とはまるで違う、ということになる。

その他、「エミシ」に関する記述として次のようなものがある。

「それ夷狄を招いて中州（東北以外の地）に入れるは野俗を変じ、以て風化（徳による教化）に靡かしめんがため」〔類聚国史〕延暦一九年五月二二日条

「夷俘の性、平民と異なり、皇化に馴れるといえども野心なお存す」〔同上 弘仁七年八月一日条〕

「凡そ夷俘の性、野心を悔いることなし」(『三代実録』貞観八年四月二日条)

これらの資料は、野心を忘れず、皇化に従わない「エミシ」の人々の様子を表したものであるが、軍事的に制圧するだけではなく、平和的に服従させようとしている意図が見える。

また、

「夷狄愚闇」(『続日本紀』養老七年九月一七日条)

「狄俘ははなはだ□謀多し、その言うところ恒なし」(同上 天平九年四月一日条)

「恩義をかえりみず」(同上 宝龜一二年二月二日条)

「夷狄の情、貪欲を業とする」(『類聚三代格』承和一二年九月八日官符)

などからは、礼儀知らずの様子がうかがえるが、一般民衆と比較して取り立てて違っているとも思われない。

さらに、食生活については

「恒に旧俗を存し、まだ野心改めず、狩猟を業となし、養蚕を知らず、しかのみならず、居住定まらず、浮遊すること雲の如し」(『類聚三代格』延暦一七年四月一六日官符)

「夷俘を養うにより、常に殺生を事とす」(『正月五月の二節、俘饗に用いんがため、狩猟の類、勝て計うべからず』(『類聚三代格』貞観一八年六月一九日官符)

とあり、中国の資料である『通典』(成立九世紀)の「蝦夷国」に関する説明(顯慶四(六五九)年、倭国の使者に従って唐に入朝)にも

「海島中の小国なり。その使の鬢、長さ四尺。尤も弓矢を善くす。やを首に挿し、人をして之を戴きて立たしめ、四十歩にして之を射て、中らざること無し。大唐顯慶四年十月、倭国の使人に随ひて入朝す。」

とあり、弓矢に秀でており、農耕文化ではない狩猟中心の生活であったことは確かであると思われる。また、中国側の資料の『山海経』にも、東北に「毛民の国」があって、「人ととなり、身に毛を生ず」とあり、その注記には背は低く、身体中ことごとく毛があり猪のようで、穴居し、衣服はない、と述べられている。

ただ、これらの記述が異民族としての「エミシ」になのか、あるいは辺境の民としての「エミシ」についてのものなのか判断することが出来ない。さらに、俘囚が「幼にして野心をすて、深く異類を愧じ、仏理に帰依し、云々」(『三代実録』貞観元年三月二六日条)や『人国記』における陸奥国の人に関する記述で「日ノ本ノ故也、色白クシテ眼ノ色青キ事多シ、人ノ形儀イヤシフ而、物語卑劣ナレドモ、勇氣正シキ事、日本ニ劣ル可キ国トモ思ハレズ」とあることも視野に入れておかなければならない。

こうした「エミシ」理解は、彼らを卑下しているとはいえず、「非人輩」とするものであろうか(「人」の規定の仕方にもよるが)。空海の「エミシ」に対する表現はさらに厳しい。

「エミシ」と朝廷

本来ならば、「エミシ」の歴史を紐解きたいのであるが、残念ながら「エミシ」側には文字が存在せず、記録が存在していない。したがって、朝廷側の一方的な資料から類推するしかない。

『日本書紀』には「蝦夷」「蝦蟇」が数多く出てくるが、そのほとんどは日本武尊の「蝦夷平定物語」(景行紀)と蝦夷を唐に連れていった斉明紀であるという。

その『日本書紀』(景行天皇四〇年条)には

「其の東夷の中に蝦夷は是最強し。男女交わり居して父子別無し。冬は穴に宿し夏は櫛に住む。毛を衣血を飲み

て、昆弟相疑ふ。山に登ること飛ぶ禽りの如く、草を走ること走獸の如し。恩を承けては則ち忘れ、怨を見ては必ず報ゆ。(略) 往古より以来、未だ王化に染はず。(略) 願はくは、深く謀り遠く慮りて、姦を探り、変を伺ひて、示すに威を以てし、懐くるに徳を以てし、兵甲を煩さずして、自らに臣隸はしめよ。即ち、言を巧みにして暴神を調へ、武を振ひて以て姦鬼を攘へ。」

とあるが、實際の大和政権の東北地方への進出は、古墳の分布などから四世紀半ば以降とされていることなどから、これらは七世紀以降の蝦夷観で潤色されたものではないかと推測されている。

大化改新(六四五)以降になると様々な記録に「エミシ」に関する記事が見られるようになる。六四七年には既に淳足柵が設置され、翌六四八年には磐舟柵が設置されている。そして六五八年には阿倍比羅夫が「エミシ」を討ち、その結果としてであろう、その年に「エミシ」の朝敵が行われ、翌六五九年には遣唐使に男女二人の「エミシ」を同行させることになる(『日本書紀』の齊明天皇五年条)。

それ以後は、出羽郡、出羽国などの国郡を設置したり、東国民一〇〇〇戸を陸奥に配したりはするものの、しばらく大がかりな東征は記録には出てこない。

ところが、七七四年大伴駿河麻呂が「エミシ」を討ってからは、七七六年には出羽国志波の「エミシ」が反乱を起こすなど対立が目立ち始める。その大伴氏が「エミシ」を討った七七四年は、ちょうど空海の生まれた宝亀五年である。

しかし、この時期は朝廷の中もめまぐるしい動きがあった。朝廷は、七七〇年道鏡を配流して政治刷新を目ざしはじめ、七八四年には都を長岡に移し、さらに七九四年には京都に移すという大変な状況下である。そうした中にあって、「エミシ」との交易を禁止したり(七八七年)、坂上田村麻呂を征夷大將軍に任じて(七九七年)何度も「エミ

シ」征討に行かせ、胆沢城や志波城を築くなどの軍事的行動をする一方、坂東・北陸の民九〇〇〇人を陸奥に配するなど朝廷側の積極果敢な攻勢が目につくようになる。そうした状況の中、空海は八〇六年（大同元年）唐から帰国し、八一五年小野岑守が陸奥守に就任するにあたり、「野陸州に贈る歌」を書くのである。そして翌八一六年には高野山が開創される。

その後も征討は続き、八七八年小野春風が鎮守將軍に任ぜられ、「エミシ」を降伏させ、翌八七九年、やっと長い戦いは終息することになる。

ところで、大化改新以前の動きについて津田左右吉は、「エミシ」に対する民族的活動は、大化改新の前までは、大和地方に放任してあったので、「東国人は朝廷の保護を頼まず、自分の力で徐々にエミシを圧迫して、その生活の場を拡張」ていったという。それを高橋富雄は「静かな征服」「文化征服」と呼ぶ。

しかし大化改新以後は、中央集権国家体制が確立するに伴い、「エミシ」戦略も朝廷直轄の事業になり、軍事的征討も行われるようになったために、必然的に「エミシ」の抵抗などの様子が記載されるようになったという。

さらに、高橋富雄は次のことを指摘している。「律令時代になっても、この時期（律令以前）に見られた「文化征服」の原理が、いぜんとして、基調的な意味をもっているということである。——中略——奈良末〜平安初期のいわゆる「軍事征服」の時代においても、それは、形を変えて、征服戦の底辺を支配していた。現地の事情に明るい部将たちが、最後まで、平和的に事態を收拾しようとしていたのは、そのあらわれの一つであったし、「夷をもって夷を制す」というのが、長く、蝦夷経営の原則のように伝統化し、「慰諭」「教諭」によって、その帰順をかちとろうとしている」と述べている。こうした点は、『性霊集』における「エミシ」の問題を考えるに当たって重要な事柄である。

う。

まとめ

以上は、「エミシ」の実態に迫ろうと現代における研究者が考察してきた成果をまとめたものにすぎないが、その限りにおいては、『日本書紀』の景行天皇条を除いて、ほとんどが狩猟生活をし、山の中に住んでいた、ということに述べているものの、非人間的な存在としているわけではない。逆に「エミシ」出身者が朝廷に登用されたり、東国の民を陸奥に送り込んでいるということから、狩猟生活が中心で、農耕はほとんど行われていなかったにしても、一部の「エミシ」は言葉も理解できるし、それほど文化が違っていたわけではないと想像することが出来る。また、「越の蝦夷の沙門に仏像を与える」等という記録もあり、少なくとも辺境の民としての「エミシ」にはそれなりの文化があったのではないかと思われるし、朝廷側にもそうした認識があったように思われる。

このように他の文献では「エミシ」に対して非人間的な表現はほとんどないにもかかわらず、『日本書紀』と空海だけがあのような表現をしている。単に空海が『日本書紀』の知識を持っていたとか、それが朝廷での一般的な認識であったとか、あるいは中華思想の影響であるというだけでは説明がつきそうにもない。

どうして空海は、「エミシ」に対してあれ程までの表現をしたのだろうか。空海自身の中に何らかの別の問題があったのではないだろうか。そうした点については次の課題としたい。

以上

参考文献

「エゾの歴史」海保嶺夫著 講談社選書 一九九六年二月

「蝦夷」 高橋富雄著 吉川弘文館 一九九五年二月

「蝦夷」 高橋崇著 中公新書 一九八六年五月

「古代蝦夷を考える」 高橋富雄著 吉川弘文館 一九九一年十二月

「歴史のなかの東北」 東北学院大学史学科編 河出書房新社 一九九八年四月